

農業総合研究センター かわら版

第131号 令和3年6月14日発行

山形県農業総合研究センター 研究企画部
〒990-2372 山形市みのりが丘6060-27
電話：023-647-3505

*研究企画部では、記事に関する皆様からのご意見ご要望をお待ちしております。

〈主な内容〉	■ 日本育種学会受賞	・・・1ページ
	■ 山形県科学技術奨励賞受賞	・・・2ページ
	■ 吉村知事を迎えて 「つや姫」「雪若丸」田植えイベント	・・・3ページ
	■ 養豚研究所で HACCP 衛生管理を導入	・・・3ページ
	■ 「食品加工支援ラボ」 加工技術研修会	・・・4ページ
	■ 若手研究者からの一言メッセージ	・・・4ページ

受賞
おめでとう
ございます

水稲品種「つや姫」育成グループ

日本育種学会 2020 年度 学会賞を受賞



水田農業研究所の水稲品種「つや姫」育成グループ（15名）が日本育種学会2020年度学会賞を受賞しました。研究所が創立100周年を迎えた節目の年に、学会賞を受賞でき、二重の喜びとなりました。

新型コロナウイルス感染拡大防止から、受賞講演は本年3月20日にオンラインで行われ、賞状は今秋の学会で授与されるため、今回、お披露目できないことは非常に残念です。

受賞題目は「炊飯米の新たな外観評価法を用いた広域適応性極良食味水稲品種『つや姫』の育成」です。

受賞理由として、「水稲品種『つや姫』は極良食味品種として知られているが、その育成に当たり、食味試験で目視によって評価していた外観を白さ、つや（光沢）、外観に分けて評価し、白さについては分光測色計を利用した評価法を確立した。また、『つや姫』は高温登熟耐性に優れ、現在、山形県から宮崎県まで10県の奨励品種として作付けされている。さらに山形県では一定の栽培条件を満たす生産者のみの栽培でブランド化を図っており、これらの成果は今後の水稲育種に大いに貢献する。」との言葉をいただきました。

日本育種学会第139回講演会 学会賞受賞講演

炊飯米の新たな外観評価法を用いた広域適応性極良食味水稲品種『つや姫』の育成



令和3年3月20日（土）
オンライン

山形県農業総合研究センター
水田農業試験場水稲品種
「つや姫」育成グループ

（山形県農業総合研究センター水田農業研究所 中場 勝）



中場所長によるオンライン講演

育成、その後の普及及びブランド化に当たって、御尽力、御協力いただいた多くの方々に、あらためて感謝申し上げます。

これまで本学会賞を受賞した水稻品種は、「コシヒカリ」「ササニシキ」「日本晴」「きらら397」「ひとめぼれ」「ヒノヒカリ」など昭和を代表する品種から、現在もなお全国的に作付けされている品種まで、いずれも大品種で、「つや姫」もこの仲間入りができたことは、育成地として、またブリーダーとしてこの上ない喜びです。

水稻の品種育成には10年以上の歳月を要します。前任者から後任者へ想いをしっかりと引き継いでいくことが重要です。今後も生産者、実需者、消費者にメリットのある品種を育成するため、先日1本1本想いを込めて田植えを行いました。



小松智彦専門研究員が 山形県科学技術奨励賞を受賞

畜産研究所家畜改良部の小松智彦専門研究員（現：置賜総合支庁産業経済部家畜保健衛生課技術主査）が、第19回山形県科学技術奨励賞^{※1}を受賞しました。

授与式は当初、県庁にて知事から授与される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症のため、最上総合支庁産業経済部長から3月29日に当研究所所長室において授与されました。

対象となった研究成果は「黒毛和種牛肉の食味成分に関する研究と種雄牛選抜への応用」です。

本研究では、黒毛和種牛肉の新たな食味指標として、「うまみ」「甘み」に関連するイノシン酸とグリコーゲン含量の重要性を見出し、イノシン酸分解酵素の遺伝子多型が熟成による変化に強く影響すること、グリコーゲン含量は遺伝的改良が可能であることを明らかにし、これらの知見に基づき、食味に関して優れた能力を持つ新規種雄牛「福福照」号を選抜しました。

また枝肉市場の競り前までに1頭ごとの食味成分値を表示する技術を確立するとともに更なる迅速評価のためにNMRによる評価法を確立し、小型NMRに応用する研究を継続しました。

さらに和牛肉の微量な香気成分について、GC×GC-TOFMSによる分析法を確立し、遺伝的改良や飼養管理技術の向上に向けて研究を継続しました。

今後、これらの研究成果が県産肥育牛のさらなる食味向上に寄与することが期待されます。



最上総合支庁産業経済部 川井部長から授与



受賞後本人を囲んでの記念撮影



分析の様子

※1 山形県科学技術奨励賞

県内において科学技術の研究開発に従事し、県内産業の振興及び県民生活の向上に資する研究成果をあげた40歳未満の者を対象に表彰されるもの



吉村知事を迎えて

「つや姫」「雪若丸」の田植を行いました



5月19日(水)に農業総合研究センター内の圃場において、吉村知事による「つや姫」「雪若丸」の田植を行いました。

今年は、県内の新型コロナウイルス感染状況を考慮し、つや姫レディ、チーム雪若丸等のみの少人数で、マスク着用での田植えとなりました。

あいにくの小雨ふる中、秋には美味しい「つや姫」「雪若丸」「はえぬき」を全国に届けられることを願って、参加者は1株1株、心を込めて丁寧に植え付けました。

田植え後は比較的好天が続いていることから、活着は良好で、生育は順調に進んでいます。

「つや姫」の全国トップブランド評価のさらなる向上と、「雪若丸」の認知度向上を図るため、当センターでは栽培技術の開発や食味向上技術の確立に取り組んでいきます。



田植えをする吉村知事

養豚研究所で HACCP に基づく衛生管理を導入

養豚研究所には試験豚の枝肉調査のため「簡易と畜場」が設置されています。

このたび、食品衛生法等の改正(H30.6)により、すべてのと畜場において、令和2年6月までに「HACCP に基づく衛生管理」を導入することが義務化されたことから、「HACCP に基づく衛生管理」の導入に取り組みました。

と畜場における「HACCP に基づく衛生管理」では、家畜のとさつ・解体処理工程において起り得る全ての危害要因を洗い出し、人の安全性に対する危害の程度を評価し、中でも重大な危害を発生する危害要因を「重要管理点(CCP)」の工程で除去、または人の健康に害を与えない程度に低減化することとされています。

当研究所では、と畜処理を25の工程に分け、残毛や消化管破損など合計40の危害要因をリストアップし、危害要因一つ一つについて重大性を評価し、管理手段を検討しました。

その結果、枝肉の確認検査(検品)と冷蔵保管の2工程を重要管理点(CCP)に位置付け、危害の低減化を図ることにしました。この2つの重要管理点について「管理基準(CL)」を設定するとともに、管理基準を満たしているか、常にモニタリングし記録しています。また、管理基準を満たしていなかった場合の対処方法を定め、管理を行っています。

今後は、「HACCP に基づく衛生管理」を取り入れた新たな管理基準によりとさつ・解体処理作業を進め、これまで以上に衛生管理レベルの向上に努めて参ります。



CCP1(検品)



CCP2(冷蔵保管)

「食品加工支援ラボ 加工技術研修会」を通じた商品開発



試作品の数々

5月27日(木)、農業総合研究センター食品加工支援ラボにおいて、第1回目の「食品加工支援ラボ加工技術研修会」を開催しました。

えだまめ乾燥加工をテーマに、昨年度の成果情報として公表した膨化乾燥品及び減圧フライ加工品の実習及び事例紹介を、講義を交えながら行いました。受講者全員が電子レンジを使用したえだまめの膨化加工を実習し、活発な意見交換がなされました。



アップルパイ

イチゴジャム りんごシロップ漬け

「食品加工支援ラボ加工技術研修会」は、県産農産物を活用した加工食品の開発を目的に年間約10回開催しています。新型コロナウイルス感染拡大防止のため少人数(定員8名)としたことで、全員が実習に参加できることから満足感が高まっています。今後はセミドライフルーツと菓子への応用、ゼリー菓子、鮮度保持に留意したカットフルーツ及び生地から作るパイをテーマに研修会を開催し、当部の研究成果を伝えると共に、販売促進等の共通課題も取り上げます。

受講後、個別の試作や新商品開発・販売に発展するケースも出ており、食品加工支援ラボを活用しながら、研究成果の技術移転や新商品開発のヒントとなるような加工技術情報を提供し、県産農産物の付加価値向上に努めていきます。



乾燥機から取り出したえだまめの状態を確認



減圧フライヤーを使ったえだまめ加工品の製造



ラボ利用して商品化されたもの

若手研究員からの一言メッセージ

最上総合支庁産地研究室
研究員 宇野 千尋

令和2年度に新規採用職員として最上産地研究室に配属になり、野菜の試験研究を担当しています。

今年度は大玉トマトの適正な生育指標の見える化のためのバランスシートの作成や、たらのきの優良系統選抜に関する試験を担当しています。現地調査へ行く機会も多いので、生産者の方とのコミュニケーションをしっかりとって、多くのことを吸収できるよう心がけています。

最近スーパーへ行くと農産物の産地や品質をじっくりと見るようになり、この仕事に就いてからの自分自身の変化を感じています。太平洋側の出身のため、この冬は新庄の雪の量に大変驚きましたが、春が近づく喜びも一段と大きいように感じました。

日々勉強の姿勢を忘れずに、知識や技術をしっかりと身に付け、山形県の農業に貢献できるよう努力していきたくと思います。

